
ボートのふたり

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボートのふたり

【Nコード】

N58920

【作者名】

大森ろら

【あらすじ】

ボートに乗ってふたりの時間を楽しんでいるカップルに訪れた不穏な気配とは……………

日常に潜む闇を描いた物語。

風がすこし冷たいせいか、池に出ているボートの数はそれほど多くなかった。

古びた桟橋からそつとボートに乗り移った瞬間、ゆらゆらとボートが揺れ、亜衣はバランスをとるように両手を広げた。

「だめだ」

怒鳴るような声におどろいてふりかえると、ボート屋の男が子供の頭を叩くように手を下にふっているのがみえた。

「あぶないからはやく座って」

彼女が腰をおろしてもしばらくボートは不安定に揺れていた。

男は桟橋に立ってふたりのボートがゆっくりと離れていくのを見ていたがやがて肩をすぼめるようにして小屋にもどっていった。

彼女の向かい側に座っている広樹はまわりをみまわしながらオールを漕いでいる。ほかのボートに乗っているのも彼らとおなじようなカップルたちだったが、むこうの池の端のほうでとまっているボートだけは、若い男がふたりで乗っているようだった。

「そうだ、写真とろう」

広樹はオールから手をはなすと、鞆からデジタルカメラをとりだして亜衣にむけた。彼女は笑顔をつくり、すこしポーズをつけたりして何枚か撮らせた。それから交替して彼のこともやはり数枚撮った。寒いのか彼の顔はすこし白っぽかった。

「あんなにたくさんの袴姿の女の子をいっぺんにみたの、はじめてだよ」

「うん」

「まあ、亜衣がそのなかでも一番よく似合ってたけど。今日一日だけなんてもったいないよね。ほんとに」

「でもこれたいへんなんだよ、着るの。朝早くから美容院にいった髪をセットして、着付けしてもらって」

「でもいいよ、それ」

「わかるけど」亜衣はほほえむ。「でもたぶんもう一生着ることはないね、これ」

「そうだよなあ」

広樹の残念そうな顔に亜衣はほほえんだ。

雲に隠れていた太陽ができて水面をきらきらと輝かせた。ボートが一艘、ゆつくりとこちらにやってくるのが彼女の視界にはいった。男がふたりで乗っている。どちらも帽子をかぶっていて、ひとりには白いニット帽、もうひとりは赤い野球帽だ。体は大きいけれどまだ十代のようにみえた。ふたりはこちらを見ているようだった。「あつちのほうに行ってみない？」彼女はきれいな羽の力モたちが泳いでいるほうを指差した。

「オッケー」

彼女は揺れを感じながら棧橋のほうをふりかえった。ひとの姿はなく、ボートが枝豆の鞘のようにしずかに並んでいる。

「風がやんだね」

広樹は帽子を脱ぐためにオールから手を離れた。額にすこし汗をかいている。彼は髪をなでつけながら、目の前に座っている彼女の姿をじっとみつめた。サクラの形の髪飾り、若草色の半襟、薄桃色の地に白、赤、金の桜が散った着物、緑色のぼかし袴。

亜衣は首をひねるようにして、少年たちのボートがこちらに近づいてくるのをみていた。

「ねえ、もう戻らない」亜衣は言った。「どつかであったかいものでも飲もうよ」

広樹も亜衣の視線の先に気づいた。ちょっとおどろいたような、困惑したような表情が浮かぶ。

「だね」と彼は言った。「さてさて、戻りますか。すこし揺れますからご注意ください」

少年たちはどんどん近づいてきていた。ふたりのほうを見てにやにや笑っている。広樹は力をいれてオールを漕ぎはじめた。オール

がばしやばしやと水の表面を打った。彼らのボートは無駄に揺れるばかりで進みが遅いが、少年たちのボートは嘘のようにすうっと水を切り裂いて近づいてくる。

口元をかたくした広樹は棧橋へむかつて真っ直ぐ漕いでいたが、ふりかえると少年たちのボートがそれをふさぐようにはいつてくるのがみえた。

「なんなんだよ」

「ねえ、おちついて」

亜衣が不安そうに膝をそろえて彼のことをじっとみつめる。

「ふざけてるだけよ」

他のボートはここで起こっていることには気づいてないようだった。

おーい、と漕いでいないほうの少年がふたりにむかつて手をふった。なにか叫んでいる。何度目かで亜衣は少年が「おめでとう」といつているのに気づいた。

「おめでとーおめでとー」

この袴のせいなんだ、と亜衣ははっとした。この袴姿が彼らの関心をひいたんだ。

広樹は黙って棧橋のほうをみている。ボート小屋にはひとがいるのだから姿がみえない。

おーい、無視すんなよ、と少年が叫んでいる。

広樹はボートの方向を変えた。急がずに、ゆっくりと漕いでいく。少年たちはふたりのボートにむかつて着実に近づいてくる。広樹はそれを避けるように漕いでいく。はたからみたら、友達同士でふざけあっているようにみえたかもしれない。

気づくとふたりは桜の枝がたれさがっている池の端まで追いやられていた。枝の先にはつぼみがたくさんついていて、いくつかはもうひらいている。もうすこしたらきれいに散って水面を白い花びらが覆うのだろう。

ふたりは揺れのおさまったボート上でみつめあった。なにかいや

な目にあうのかな、と亜衣はおもった。遠くをみると、ほかのボートに乗っているひとびとがこちらをみつめている。彼らはふたりがちよっと困ったことになっているのに気づいているようだ。亜衣にはそれがわかった。彼らが直接ここにやってきて自分たちを助けてくれる気がないことも。

たぶん少年たちはとてもひどいこと、たとえば水を引つ掛けたり、オールで小突いたり、ボートを倒してわたしたちを水のなかに落としたり、といったことはしないのだろう、と彼女はおもった。彼らはただわたしたちがちよっと困るところをみたいだけなのだ。わたしたちはだからただちよっと困った顔をして、不安でたまらないといった調子でもうやめてくださいと彼らにお願いすればいいのだ。

君は喋らなくていいから、と広樹は言った。

彼女は袂に触れたまま、またボート小屋のほうをふりかえった。

人影がみえる。でも外に出てくる気配はない。ほかのボートは相変わらず静止している。せめてどれか一艘、棧橋にもどってあの人影にひとこと、このことを知らせてくれればいいんだけど、と彼女はおもった。

オールが乱暴に水を叩く音がする。波が押し寄せてふたりのボートが力なくゆれる。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5892o/>

ボートのふたり

2010年10月30日08時55分発行